

Mariela Szwarcberg,

*Mobilizing Poor Voters:
Machine Politics,
Clientelism, and Social
Networks in Argentina.*

New York: Cambridge University Press,
2015, xiii+175pp.

たか はし ゆり こ
高 橋 百合子

はじめに

政治学におけるクライアンテリズム研究は過去10年間で飛躍的に発展し、とくに比較政治分野において、理論・実証の面でもっとも活発に議論が行われているテーマといっても過言ではない。クライアンテリズムを対象とした研究論文はアメリカ政治学におけるトップ・ジャーナルにも頻繁に掲載され、方法論に関しても因果推論の面で最新の研究動向に追随するなど、この勢いは当分続くものと思われる。これらの研究はラテンアメリカ諸国を事例として実証分析を行うものが多い。その中でもとくに、アルゼンチンとメキシコの事例に着目した研究の多さが際立っている。本書評で取上げる Szwarcberg による単著は、近年出版されたクライアンテリズム研究の代表格ともいえる。本稿では、政治学におけるクライアンテリズム研究の近年の動向を紹介しつつ、本書の貢献と限界について評価を行い、残された研究課題を紹介することを試みる。

I 新しいクライアンテリズム研究の台頭

政治学におけるクライアンテリズム研究の歴史は古い。1960~70年代の初期の研究において、クライアンテリズムとは、パトロンとクライアントの間にみられる非対称的、個人的な互酬 (reciprocal) 関係と定義され、エスノグラフィックな方法を用いて、開発途上国の政治に特徴的な現象として記述されることが多かった (たとえば Scott [1972])。ク

ライアンテリズム研究発展の軌跡については Kitschelt and Wilkinson [2007] に譲るが、1980年代以降、開発途上国の多くが民主化すると、90年代に入ってクライアンテリズム研究は再び盛り上がりを見せるようになった。その背景として、次の2点が指摘される。

まず、新興民主主義諸国では民主化によって選挙の重要性が高まり、多くの国でクライアンテリズムが政治家と有権者をつなぐ重要なリンケージとして、選挙時の政治的動員を規定しているとの認識が広まった [Kitschelt 2000]。また、クライアンテリズムに依拠して選挙結果が決まることは、民主代表制の原則に反するとの批判的見解が提示された [Stokes 2007]。すなわち、クライアントである有権者が、政党綱領ではなく、物質的な利益供与などと交換にパトロンに票を「売った」とするならば (パトロンの側からみれば「買った」)、その票は、有権者の政治的選好についての情報を提供しないため、政策形成に反映されることはない。これは選挙アカウンタビリティ (有権者が選挙を通して政治家の行動をコントロールすること) を弱め、ひいては民主主義の質を劣化させることにつながるため、クライアンテリズムは新しい民主主義にとって負の影響を及ぼすとの懸念が生じた。こうして民主化後にみられるようになったクライアンテリズムの民主政治への影響が、広く研究的関心へと繋がったのだといえる。

こうした背景から台頭してきた新しいクライアンテリズム研究は、新たな定義に基づいて研究が進められている。主として、民主化論、選挙政治の分野で発展してきた研究において、クライアンテリズムは、「恣意的に提供される個別利益供与と票との自発的な交換であり、政治的支持の意思が明示されることによりその交換関係は継続する」 [Diaz-Cayeros, Estévez, and Magaloni 2016, 67] と定義される。すなわち、新たな定義は、初期の研究で用いられた、パトロンとクライアントの関係性にのみ言及した定義に、民主化に伴って選挙政治の重要性が増したことを背景に、パトロン-クライアント間の互酬関係が選挙で勝利するための政治的動員に用いられるという戦略的視点を組み込んだものと理解することができる。そして、この定義についての共通理解のもとで、近年、実証研究が盛んに行われて

きたといえる。ただし、これらの研究の中で、クライアンテリズムと類似する概念である、マシーン政治 (machine politics)、票の買収 (vote buying)、投票率の買収 (turnout buying) とクライアンテリズムが明確に区別されずに扱われることが多い点も指摘しておく。

それでは、興隆を極める新しいクライアンテリズム研究は、伝統的な研究とどのような点で異なるのだろうか。新しいクライアンテリズム論の特徴は、次のようにまとめられる。

第1に、民主化して秘密投票が遵守されるのならば、有権者 (クライアント) は政党もしくは候補者 (パトロン) から個別利益を供与されても、パトロンの望むとおりの投票行動をすることは限らないというコミットメントの問題について、ゲーム理論を用いて動機を説明する点が特徴的である [Stokes 2005]。すなわち、政党と有権者を媒介するブローカーの役割が重要であり、ブローカーは社会ネットワークに浸透することにより、有権者の行動を効果的に監視することができる。さらに、政党、ブローカー、有権者の間では、取引は将来にわたって繰り返されるということが想定され (繰り返しゲーム)、このことが裏切り行為を抑制する [Stokes 2005]。

第2に、貧困層がクライアンテリズムの対象となりやすいとの認識が共有されている。所得の限界効用逓減 (diminishing marginal utility of income) [Dixit and Londregan 1996] により、所得レベルの低い貧困層は、パトロンから供与される比較的安価な物質的利益 (生活必需品や食糧など) に大きな利益を見出すため、中間層よりも低所得者層をターゲットにした方が、パトロンにとってはより効率的に票を集めることができると考えられる。

第3に、同様の理由から、貧困層を対象として分配される社会プログラムが、クライアンテリズムにおける取引に利用される点が重視される [Diaz-Cayeros, Estévez, and Magaloni 2016]。これらの研究では、社会プログラムを中心とする物質的利益を誰に対して優先的に配分するか、という点で議論が分かれる。たとえば、分配の対象として、常に特定の政党を支持する中核投票者 (core voters) [Diaz-Cayeros, Estévez, and Magaloni 2016]、特定の政党を支持しない投票者 (swing voters)、もしくは対立候補に弱い選好をもつ投票者 (weakly

opposed voters) [Stokes 2005] に着目した研究がある。

第4に、クライアンテリズムは個人間の取引であるため、その研究にはサーベイ・データが必要であるとの認識も共有されている。近年、大規模なサーベイを行う共同研究が進められ、どのような投票者がクライアンテリズムの対象となるのかについて、精緻な研究が行われている。また、票の売買など、センシティブな質問については、回答者が過少報告する可能性が指摘されるが、そうした社会的期待迎合バイアス (social desirability bias) を軽減するために、新しい実験方法を用いて因果推論を導く試みも行われている [Gonzalez-Ocantos et al. 2012]。

このように、新しいクライアンテリズム論は、秘密投票のもとで全体像が掴みにくいクライアンテリズムという政治現象について、最新のデータと因果推論の方法に依拠してその体系的な解明を試みる点が特徴的である。

こうした特徴を有する最近の研究には、すでに述べたように、ラテンアメリカ諸国の事例に焦点を合わせたものが多数見受けられるが、その中でも、アルゼンチンとメキシコについての研究が圧倒的に多い。この事例選択の傾向は、政党の組織化の度合いと密接に関連している。すなわち、クライアンテリズムが機能するためには、パトロン、ブローカー、クライアントを結ぶ、政党を中心としたネットワークの存在が前提となる。その意味で、全国に支持基盤をもつメキシコの制度的革命党とアルゼンチンのペロン党は、それぞれの社会に深く浸透し、クライアンテリズムの温床となっていると考えられる。それ故、クライアンテリズム研究の対象として着目されるといえる。こうした文脈で発展してきたのが、アルゼンチンの事例を扱った本書である。以下、同国における貧困層をターゲットとしたクライアンテリズムの持続について、ネットワークが果たす役割を中心に論じた本書の議論を紹介し、評価を行う。

II Szwarcberg のネットワークに着目した クライアンテリズム研究

まず本書の内容は、次のように簡潔にまとめられる。本書は、(1) なぜ政治家は貧困層の政治的支持を動員するためにクライアンテリズムを選択するの

か、(2) なぜクライアントリズムに依拠した動員戦略が成功する場合と失敗する場合が生じるのか、という2つの問いを解明することを目指す。そのために、政党指導者、ブローカー、政党活動家、有権者の間の関係が、政治的、党派的、社会的ネットワークを通じてどのように構築・維持されるのかを、主としてエスノグラフィックな手法によって明らかにし、個々のアクターがクライアントリズムに関与するインセンティブを説明する。ここで分析の中心となるアクターはブローカーであり、ブローカーは「逆インセンティブ」(perverse incentive)を与えられると論じる。すなわち、ブローカーは、近隣住民の問題やニーズを把握しており、その解決策を提供する見返りに、政治的支持の動員を要求する。その一方で、政治的キャリアの形成を目指すブローカーは、政党から政治的昇進という報酬が与えられるか否かは、動員することができた票数に左右され、またそうした戦略を用いることは政党や裁判所によって罰せられる可能性が低いことを理解しているため、貧困層の票を動員するためにクライアントリズム戦略を積極的に用いることに励む。そして、①クライアントリズム戦略を用いる能力(財へのアクセスと分配する能力)だけではなく、②クライアントリズムに頼ることを選択(個人の選好)する、という2つの条件が揃った場合に、ブローカーは貧困層から政治的支持を動員することに成功することを、プエノス・アイレス州とコルドバ州における8市を対象とした比較分析によって示す。

以上が本書の概要であるが、クライアントリズム研究に対する新たな貢献は以下のとおりである。第1に、クライアントリズムを用いる「能力」と「選択」を区別し、クライアントリズムは能力のあるブローカーによる選択の帰結であること、つまり、単に能力があるだけではなく両方の条件が揃ってはじめてクライアントリズムが成立することを示すことによって、政治的支持の動員という行為の背景にある個人の意思決定のメカニズムを解明した点が、従来の先行研究と異なる(第2章)。さらに、ブローカーによる選択の結果としてのクライアントリズムを「どのように測定するのか」についても、新たな知見を提供している。先述のとおり、クライアントリズムに関するサーベイ・データでは、社会的期待迎合バイアスによる過少報告の可能性が指摘されて

おり、その軽減の方法として特殊な実験が用いられている。しかし、こうした方法は地域、時間、個人、候補者の間にみられる多様性を説明することができないため不十分と批判する(p.26)。そして、クライアントリズムは、「財を分配したかどうか」ではなく、「誰が政治集会に参加したかどうか」を監視するブローカーの存在によって確かめられると論じる(p.28)。アルゼンチンのように義務投票制度が採用されている国では投票率は自ずと高くなるため、ブローカーは投票への参加によってクライアントの忠誠を確認することはできない。そのため、ブローカーは、有権者が選挙ではなく、政治集会に参加したかどうかを監視することによって、個別利益を供与した有権者が忠誠であるかどうかを判断することができるのである。参与観察によってこの監視行為は観察可能であるため、クライアントリズムを測定するための新たな方法であるといえる。

第2に、本書は、クライアントリズムが機能するために欠かせない、ネットワークの存在そのものに焦点を合わせ、それが形成され、維持されるメカニズムの解明を試みる点が特筆に価する。具体的に、本書は、従来のクライアントリズム研究はネットワークの存在を所与としてとらえる点を批判する。そして、ネットワークを分析するメリットとして、(1)パトロン、ブローカー、クライアントがそれぞれ個別利益供与の需要・供給対象者を特定する文脈の理解が可能となること、および(2)個々のアクターが、ネットワークの中でどこに位置づけられ、どのようなインセンティブを与えられ、それが個々の意思決定にどのような影響を与えるかについての情報を得ることができることが指摘される(p.5)。すなわち、政党指導者、ブローカー、有権者が埋め込まれたネットワークを分析することによって、どのような場合にクライアントリズムが選択されるかを説明することが可能となる。さらに、本書は、このネットワークを、政治ネットワーク(political network)、党派的ネットワーク(partisan network)、社会ネットワーク(social network)と分類する(第3章)。これらの3つのネットワークが地方レベルで相互に繋がりつつ網の目を張り巡らす結果、ブローカーが有権者の行動を事細かに監視することが可能となり、クライアントリズムがその地方で強固に根付くことが説明される。この事例と

して、ペロン党の市レベルの組織である agrupaciones が分析の対象とされる。ブエノス・アイレス州のホセ・C・パス (José C. Paz) 市の agrupaciones は、水平的・垂直的なペロン党のネットワークの構築を促し、クライアンテリズムを通してペロン党の支持基盤を強固なものとし、野党の参入を難しくしている。その結果、ペロン党の長期支配を可能としていることが示される (pp.55-70)。このように、ネットワークを分析することによって、①クライアンテリズムに関与する個々のアクターのネットワークにおける相対的位置を把握し、②それがクライアンテリズム戦略を利用するための条件となる能力と選択にどのような制約を課しているのかを解明した点で、本書はクライアンテリズム研究における重要なミクロ的基礎を提供していると評価できる。

この他、逆インセンティブの予期せぬ帰結として、ブローカーが権力欲を増幅させ、パトロンを裏切って自らの支持基盤拡大に乗り出す場合を明示した点 (第5章)、逆のインセンティブは地方レベルと中央レベルの政府を横断して働き (scaling up)、市長が地方レベルのネットワークを武器にブローカーとして機能し、パトロンである大統領と結びついてクライアンテリズムを構築したことを示した点 (第6章) も本書の貢献といえる。

Ⅲ 残された研究課題

本書は、クライアンテリズム研究の発展に以上の貢献をもたらしたが、その一方で、いくつかの問題点も指摘される。第1に、本書は、クライアンテリズム戦略を用いるアクターの能力と選択を区別することによって、より詳細な意思決定メカニズムを明らかにした点が貢献であるが、政治的動員の対象とされる有権者の意思決定については扱っていない。すなわち、本書の理論によれば、ネットワークの末端ともいえる位置に置かれた貧困層がクライアンテリズムに与するかどうかは、最終的には貧困層の選択の結果と解釈できる。しかし、どのような場合に貧困層がブローカーからの利益供与に与するのか、この点に関する分析はみられない。第2に、ネットワークそのものを分析の対象とし、その構築と持続を説明するが、これは内生性の問題を孕む。ネット

ワークの存在がクライアンテリズムの前提条件ならば、クライアンテリズム戦略を用いるアクターがネットワークを構築するという因果関係の方向性と矛盾することとなる。すなわち、ネットワークとクライアンテリズムのどちらが原因で、どちらが結果なのか。著者が用いるエスノグラフィックな手法は、この点を明らかに示していない。最後に、どのような場合にクライアンテリズムが選択されなくなるのか、すなわち、どのような条件が、クライアンテリズムから民主代表制の実現に欠かせない、政策綱領に基づく政治家と有権者間のリンケージ (programmatic linkage) への移行を促すのか、明確な説明が提示されていない。この点は、他の研究でも重要な課題と認識されているものの、これまでいずれの研究も十分に解明するには至っていないと評者は考える (たとえば [Diaz-Cayeros, Estévez, and Magaloni 2016; Stokes et al. 2013])。

以上の3点は、本書の議論を超えて、クライアンテリズム研究一般について当てはまる残された課題である。とくに新興民主主義諸国において顕著な政治問題であるクライアンテリズムについての理解 (体系的な現状理解、変化を規定する要因等) を深めるためには、これらの問題点に取り組むことが今後の重要な研究課題といえる。

(注1) 「social desirability bias」に対する「社会的期待迎合バイアス」という訳語は、善教 [2016] に依拠する。ここで言及する新しい実験方法 (リスト実験) についての日本語による詳しい説明は、同論文を参照されたい。

文献リスト

〈英語文献〉

- Diaz-Cayeros, Alberto, Federico Estévez, and Beatriz Magaloni 2016. *The Political Logic of Poverty Relief: Electoral Strategies and Social Policy in Mexico*. New York: Cambridge University Press.
- Dixit, Avinash and John Londregan 1996. "The Determinants of Success of Special Interests in Redistributive Politics." *Journal of Politics* 58 (4):

- 1132-1155.
- Gonzalez-Ocantos, Ezequiel, Chad Kiewiet de Jonge, Carlos Meléndez, Javier Osorio, and David W. Nickerson 2012. "Vote Buying and Social Desirability Bias: Experimental Evidence from Nicaragua." *American Journal of Political Science* 56 (1): 202-217.
- Kitschelt, Herbert 2000. "Linkages between Citizens and Politicians in Democratic Politics." *Comparative Political Studies* 33 (6/7): 845-879.
- Kitschelt, Herbert and Steven I. Wilkinson 2007. "Citizen-Politician Linkage: An Introduction." in *Patrons, Clients, and Policies: Patterns of Democratic Accountability and Political Competition*. ed. Herbert Kitschelt and Steven I. Wilkinson. New York: Cambridge University Press.
- Scott, James C. 1972. "Patron-Client Politics and Political Change in Southeast Asia." *American Political Science Review* 66 (1): 91-113.
- Stokes, Susan C. 2005. "Perverse Accountability: A Formal Model of Machine Politics with Evidence from Argentina." *American Political Science Review* 99 (3): 315-325.
- 2007. "Is Vote Buying Undemocratic?" in *Elections for Sale: The Causes and Consequences of Vote Buying*. ed. Frederic C. Schaffer. London: Lynne Rienner Publishers.
- Stokes, Susan C., Thad Dunning, Marcelo Nazareno, and Valeria Brusco 2013. *Brokers, Voters, and Clientelism: The Puzzle of Distributive Politics*. New York: Cambridge University Press.
- 〈日本語文献〉
- 善教将大 2016. 「社会的期待迎合バイアスと投票参加——リスト実験による過大推計バイアス軽減の試み——」『法と政治』66(4) 715-740.
- (早稲田大学政治経済学術院准教授)